中等教育コース (英語教育専攻),「日英語比較論」
担当教員: 秋山正宏 (英語教育講座)

「日英語比較論 (2023 年度後期)」: 授業評価アンケートの結果とその考察

「日英語比較論」は, 中等教育コース英語教育専攻を中心とした, 英語教員免許状取得を必要/希望する学生にとっての選択科目である。授業の目標, 到達目標, 授業概要についてはウェブ上のシラバスを参照されたい。DP の上では, 学校教員養成課程, 国際理解教育コース共に, DP1「... 得意とする分野の専門的知識を修得している(知識・理解)」に対応することが意図された授業である。

この授業は全ての回が担当者自作の授業資料に基づいて進められた。担当者は, 毎回の授業終了後に, 授業時に用いる出席確認シートとは別に, 内容確認シートを Moodle に提示した。受講者には, 内容確認シート中の内容確認の問いに取り組んで, 次回授業開始前までに Moodle に提出してもらった。このことにより, 各回で学んだ内容を振り返るとともに, 時間外学習を促した。内容確認シートの正解(および必要がある場合の解説)は, 原則として提出締め切りの 1 週間後(多くの場合は当該授業回の 2 回後)に Moodle に提示した。成績評価は, 出席状況および内容確認シートの成績に基づいて算出した平常点(30%)と最終的な持ち帰りワークシート(70%, やはり Moodle に提示)に対する評価に基づいて行った。

今年度の受講者数は 21 名である。なお体調不良, 各種実習, 研修参加, 学外での各種資格試験の受験, 就職活動, 後学期途中からの留学等々の理由で事前に連絡のあった学生については, 非同期遠隔型授業としての対応を行った。

授業評価アンケートは最終回(第 15 回)授業時に行い, 回答者は 14 名であった(欠席者 2 名, 残り 5 名は非同期遠隔型授業に参加し, アンケート調査には不参加)。アンケート項目は, 授業資料の難易度, 担当教員の解説のわかりやすさ/わかりにくさ, 授業で学んだ内容に対する興味, 授業資料のあり方, 内容確認シートの意義等について尋ねるものであった。

以下は, 個々の質問項目とそれについての学生の回答, およびそれについての担当者の若干の考察である。

A　この授業で使われた授業資料および関連事項についてお尋ねします。

A-1　全般的に言って, 授業資料の難易度についてどう思いますか(括弧内の数値は回答者数)。

1.	非常に難しかった	(2)
2.	やや難しかった	(6)
3.	ちょうどよい	(6)
4.	比較的やさしかった	(0)
5.	非常にやさしかった	(0)
	平均値: 2.43	

「ちょうどよい」の評価をした学生数が 6/14 (43%)であり,「やや難しかった」あるいは「非常に難しかった」を選択した学生数が 8/14(57%)であった。担当者としては,「やや難しい」と感じる程度の難易度を目標として資料を作成しているため, 今回の結果はおおよそ想定通りと言える。ただし, 基本的に同じ授業資料に基づく授業であっても, 学生側の難易度についての感じ方は年度ごとに異なり得る。全ての授業資料を通した体系性を維持した上で, 部分的な修正を行うことは難しい作業であるが, 年度ごとに微調整を行いつつ授業を展開することに努めたい。

A-2　授業資料を用いて行われた担当教員の説明のわかりやすさ/わかりにくさについてあなたはどのように思いますか。

1.	非常にわかりにくかった	(0)
2.	ややわかりにくかった	(2)
3.	どちらとも言えない	(4)
4.	比較的わかりやすかった	(6)
5.	非常にわかりやすかった	(2)
	平均値: 3.57	

肯定的な評価(4 あるいは 5）を選択した学生数は 8/14(57%)であったが, 否定的な評価(1 あるいは 2）が 2 名の学生から寄せられている。今後もよりわかりやすい授業を展開するための努力を継続せねばならない。

A-3　授業資料を通して学んだ内容は, (難

易度は別にして)あなたにとっておもしろい(知的好奇心をくすぐる，喚起する，といった意味で)ものでしたか。

1. 全くおもしろくなかった (0)
2. あまりおもしろくなかった (1)
3. どちらとも言えない (4)
4. 比較的おもしろかった (7)
5. 非常におもしろかった (2)

平均値: 3.71

肯定的な評価(4 あるいは 5)をした学生数は 9/14 (63%)であり，ある程度受講者の知的好奇心を喚起することが出来たようである。ただし 1 名からとはいえ，否定的な評価(1 あるいは 2)も寄せられている。言語の規則性を科学的に考えることの面白さが伝わるような授業にする工夫を今後も重ねたい。

A-4 コロナ禍の中で遠隔非同期型授業を行なっていたことの名残で，この授業で用いられた資料は，ほぼ全ての作業についての解説が文章化されたものとなっていました。要するに，担当者が口頭で作業について説明する内容と(ほぼ)同じ内容の文章が資料中に登場していました。みなさんの想像に委ねる部分が大きくなりますが，この点についてどのように考えますか。

1. 口頭で説明する内容については一切文章化しないのがよい (0)
2. 口頭で説明する内容であっても，文章化がなされる場合と，なされない場合の両方があるのがよい (3)
3. 現状通り，口頭で説明する内容について，全て文章化がなされるのがよい (6)
4. 特に意見はない (5)

この質問を設定した背景については，質問の文章中で述べられている通りである。加えて言えば，現在も各回ごとに事前の申し出があった学生に対して非同期遠隔型授業を行っている。非同期遠隔型授業においては，通常の対面式授業であれば口頭で説明するだけで済ませる内容も，授業資料中に文章化する必要がある。対面式授業に出席する学生と非同期遠隔型授業に参加する学生との間に授業資料に関する格差が生じないようにするために，対面式授業においても非同期遠隔型仕様の授業資料を引き続き使用した。この問については，「特に意見はない」を選択した学生が 5 名であったが，それ以外の学生は全員 2 あるいは 3 を選択している。要するに，口頭で説明する内容についても少なくとも一部については文章化することが望まれているようである。この点は次年度以降の授業資料作りの参考としたい。

A-5 やはりコロナ禍の中で遠隔非同期型授業を行なっていたことの名残で，この授業で用いられた資料は，全て作業の答えが記入された状態で作成，配布されていました。みなさんの想像に委ねる部分が大きくなりますが，この点についてどのように考えますか。

1. 作業の答えが全く記入されていないのがよい (2)
2. 作業の答えが記入されている場合と，記入されていない場合の両方があるのがよい (1)
3. 作業の答えが全て記入されているのがよい (6)
4. 特に意見はない (5)

この質問を設定した背景も，質問 A-4 を設定したのとほぼ同じ理由に因る。非同期遠隔型授業においては，資料中の作業の答えを基本的に資料中に提示する必要がある。やはり対面式授業に出席する学生と非同期遠隔型授業に参加する学生との間に授業資料から受け取れる情報に関する格差が生じないようにするために，対面式授業においても，非同期遠隔型仕様の授業資料と同様に作業の答えが記入済みとなった授業資料を引き続き使用している。この問については，「特に意見はない」を選択した学生が 5 名であったが，それ以外の学生の内 7 名が 2 あるいは 3 を選択している。要するに，半数の学生が，作業の答えが少なくとも部分的に(あるいは全て)記入済みとなっていることを期待していることになる。ただし，1 を選択した学生が 2 名いることも確かであり，この点は無視すべからざるところであろう。作業の答えを資料中に提示することには，授業時の解説を答えを導き出すプロセス自体により力点を置いたものにすることが出来るという利点があるとも思われるため(答えを示すことに時間を取られない，という程度の意味で)，

次年度以降も一部の作業の答えは資料中に提示することになるであろう。今後は答えを資料中に予め提示する作業と提示しない作業の線引きを行っていかねばなるまい。

A-6　A-4, A-5 とも関連しますが，この授業では，新型コロナウィルスの 5 類感染症移行後であるにもかかわらず，体調不良等で事前の連絡があった方には遠隔非同期型授業としての扱いを行なっていました。この点について，どのように考えますか。

1. 遠隔非同期型としての対応は全く行わないのがよい (1)
2. 遠隔非同期型としての対応はあってよいが，その適用を現状よりも厳しく制限するのがよい (0)
3. 現状通り事前に申し出があった場合は，もれなく遠隔非同期型としての対応をするのがよい (8)
4. 特に意見はない (5)

この問いについては，「特に意見はない」とした学生が 5 名であったが，それ以外の学生の内 8 名が 3 を選択し，現状通りの遠隔非同期型授業としての対応を望んでいる。同期型であれ，非同期型であれ，遠隔授業はコロナ禍を経て得られた肯定的に評価できる産物であり，今後もその長所を生かす形で授業を展開したいと考えている。

A-7　この授業で取り上げた以下の具体的な話題の中で，特に興味深いと思うもの，関心を持ったものがあれば括弧の中に「〇」を記入して下さい。

第 1 回　日英語における「主語」の重要性 (8)
第 2, 3 回　日本語の文構造 (2)
第 4 回　日本語の従属節構造 (1)
第 5 回　日本語(と英語)の受身文 (2)
第 6 回　日本語(と英語)の(wh)疑問文 (4)
第 7 回　移動に課される諸条件 (3)
第 8 回　格の体系(a): 日本語の多重所有格現象 (2)
第 9 回　格の体系(b): 日本語の多重主格現象 (2)
第 10 回格の体系(c): 日本語の所有格-主格交替現象 (2)
第 11 回　各種句表現の内部構造再考 (2)
第 12, 13 回　節レベルの範疇(S, S')の再分析 (2)
第 14 回非対格仮説 (3)
第 15 回動詞句内主語仮説 (1)

辛うじて，全ての話題がそれぞれ最低でも 1 票を得ることが出来たが，圧倒的とも言える最多得票となったのが第 1 回授業に扱ったやや初歩的な内容であったことは反省材料と言うべきであろう。

B　内容確認シートについてお尋ねします。内容確認シートを十分に活用できなかった回 (第 7, 10 回)もありましたが，内容確認シートは，当該の回に学んだ内容を振り返ったり，理解を深めたりするのに有益だと思えましたか.

1. 全く有益には思えなかった (0)
2. あまり有益には思えなかった (0)
3. どちらとも言えない (2)
4. 比較的有益なように思えた (9)
5. 非常に有益なように思えた (3)

平均値: 4.07

肯定的な評価(4 あるいは 5)をした学生数が,12/14 (86%)であり,否定的な評価(1 あるいは 2)をした学生はいなかった。受講者は，概ね内容確認シートの意義を認めていると考えられる。内容確認シートは，時間外学習を促す上でも，平常点を算出する上でも，重要なアイテムでもあり，次年度以降も改善を加えつつ使用を継続して行きたい。

C　あなたは，この授業を通して，外国語としての英語，あるいはより一般的に人間の言語が持つ規則性に興味・関心が向くようになりましたか。

1. 全くそういった興味・関心が持てなかった (0)
2. あまりそういった興味・関心が持てなかった (0)
3. どちらとも言えない (3)
4. そういった興味・関心をやや持つようになった (10)
5. そういった興味・関心を非常に強く

持つようになった　　(1)
平均値: 3.86

この授業の性格を考えると，質問文中の「外国語としての英語，あるいはより一般的に人間の言語が持つ規則性」を「母語としての日本語，外国語としての英語，あるいはより一般的に人間の言語が持つ規則性」とすべきであったが，この点は担当者の誤りである。ともあれ，肯定的な評価(4 あるいは 5)をした学生数が 11/14 (79％)であり，否定的な評価(1 あるいは 2)をした学生はいなかった。ある程度言語の規則性についての関心を掻き立てることが出来たと考えてよいだろう。

D　　(以上のアンケート項目を踏まえ)最後にこの授業全体を振り返って，何かあれば，自由記述でおねがいいたします。

この自由記述に回答した学生数は 4/14 に過ぎないが，授業の内容および担当者の姿勢について否定的な評価を書いた学生はいなかった。